

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 30 日現在

機関番号：31106

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720248

研究課題名(和文)言語ポートフォリオを活用した自律英語学習における評価モデルの構築

研究課題名(英文) Developing evaluation model of autonomous English learning by utilizing language learning portfolio

研究代表者

石橋 嘉一 (ISHIBASHI, Yoshikazu)

青森中央学院大学・経営法学部・講師

研究者番号：40604525

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、大学生の自律的な英語学習の評価モデルを構築することを目的とした。具体的には、大学生が授業外に自律的に行う英語学習内容と、言語熟達度(TOEIC®スコア)の高低の関係を比較し、検討した。その結果、言語熟達度の低群ではテキスト中心の学習が展開され、高群では他者とコミュニケーションをともなう学習が展開される傾向を示した。また、研究後半では、オンライン英会話と学習履歴を記録できるシステムをweb上に構築し、自律英語学習の遂行可否について、その要因の調査を行った。さらに、被験者にインタビュー調査を実施し、自律英語学習の評価モデルを試作した。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to propose an evaluation procedure about autonomous English learning and analyzed the informal English learning contents of Japanese college students and also described the relationship between the learning content studied and a student's English proficiency level. The students with high TOEIC®IP scores tended to choose interactive and authentic English learning in informal learning settings. In contrast, the students with low TOEIC®IP scores tended to choose text-based materials and less interactive English learning. These students were also likely to select remedial learning materials. On the basis of these findings, a model of the relationship between the informal English learning content studied and a student's English proficiency level was developed. Lastly, this study utilized online-conference system combined with learning portfolio and analyzed the processes of autonomous English learning behavior quantitatively and qualitatively.

研究分野：コミュニケーション学、教育学、英語教育学、外国語教育

キーワード：コミュニケーション学 英語教育 自律学習 言語熟達度 学習ポートフォリオ TOEIC 英語力 評価

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

自律英語学習者の育成には、学習者が自己の学習過程をモニタリングするメタ認知能力、すなわち客観的な視点で自己の学習を調整・管理する能力と、学習ストラテジーのレパートリーの多様性が重要だと認識されている（小嶋・小関・廣森編 2010）。そのため、学習者のメタ認知能力と学習ストラテジーを育成するための学習法が開発されてきた（Chamot & O' Malley Model 1994, Chamot Model 1999 他）。特に、言語ポートフォリオの活用は、メタ認知能力と学習ストラテジーの教授と評価という双方の面で活用できる媒体として、研究のホットエリアとなっている。欧州連合諸国では初等から高等教育に至る約3万人の被験者を用いて言語ポートフォリオのパイロットプロジェクトが実施され、その評価レポートが刊行されている（Council of Europe 2000, Final Report: A European Language Portfolio Pilot Project Phase 1990-2000）。日本においては峯石（2002）において、大学生約300人を対象に、教授手段としてのポートフォリオに関する実証的な研究が報告されている。しかしながら申請者は言語ポートフォリオの活用で自律学習者の育成が目的とされた場合、やはり自律学習へと向かう学習者の行動の変容をより体系的に捉えるための評価モデルが必要と考えている。本研究では、自律英語学習を目標設定、学習遂行、評価という3段階に分類し、各段階においてどのような学習行動の変容が生じたかを経時的、体系的に調査し、評価モデルの構築を目的とする。

2. 研究の目的

本研究では、言語ポートフォリオを活用した自律英語学習行動の評価モデルを創出する。

- (1) 目標設定段階において、学習目標の具体性と具現性について評価を行う。
- (2) 学習遂行段階において、メタ認知能力の観点から学習ストラテジーのレパートリーの種類・数量、及び学習内容と学習時間の伸長を評価する。
- (3) 評価段階において、自己の学習に対する評価・内省能力について評価する。
- (4) (1)～(3)の各学習段階で実施された評価をもとに、言語ポートフォリオを活用した自律英語学習の評価モデルの構築を行う。

3. 研究の方法

(1) 先行研究の調査から、研究目的の再検討を行い、まずは、自律英語学習の遂行に大きく影響すると考えられる言語熟達度と学習

内容の評価モデルを構築した。

- (2) 上述(1)から、英語専攻の大学生627名（1年生321名、2年生306名）に質問紙調査への協力を依頼した。質問紙調査は、授業外に行う英語学習の内容について自由記述で回答を依頼した。また、TOEIC®IPスコアの記述を合わせて依頼した。その結果、1年生172名、2年生211名からTOEIC®IPスコア記述の回答を得ることができた。本研究では、言語熟達度の高低をTOEIC®IPスコアにより測定するため、最終的にスコアの記述が得られた383名のデータを分析対象とした。
- (3) (2)の研究結果から、他者とインタラクションをとまなう自律英語学習の実施層に特徴的な傾向がみられたため、オンライン英会話と学習履歴を記録できるシステムをweb上に構築し、自律英語学習の遂行可否について、その要因の調査を行った。さらに、被験者にインタビュー調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 分析対象の383名のテキストデータを分析した結果、最終的に理論的飽和と判断した31個の概念を抽出した。抽出した授業外英語学習内容の概念を言語活動の領域と類似度の観点から、ELPの分類を応用し、読む(Reading)、聞く(Listening)、話す(Speaking)、書く(Writing)、やりとりをする(Interaction)の5つの言語活動の領域カテゴリに分けて整理した。ELPの分類を援用する理由は、本研究で生成された授業外英語学習の概念が31個と多様であったため、概念の特徴をさらに分かりやすく調査結果として整理し、提示するためには、ELPの国際的に認知された言語活動領域を参照することが有用と考えた。一方、ELPの分類が調査協力者のテキストに忠実に分析した本研究の結果に影響しないように、上述の領域カテゴリに入らない概念に関しては、新たな概念カテゴリを生成した。

授業外英語学習と言語熟達度の高低の関係を可視化するための概要図を提案した（図1）。図1の構成について説明する。まず、図1では、言語熟達度の高低を示すTOEIC®IPスコアの高低を縦軸に配置した。次に、授業外英語学習内容の概念を横軸に配置した。授業外英語学習の概念は、言語活動の領域を基軸にグループ化した。グルーピングの領域は、左欄が言語情報のインプット領域（Input: Reading, Listening）、右側がアウトプット領域（Output: Speaking, Writing）、中央がインプットとアウトプット双方の活動がともなうインタラクション領域（Input and Output: Interaction）とした。また、上述の

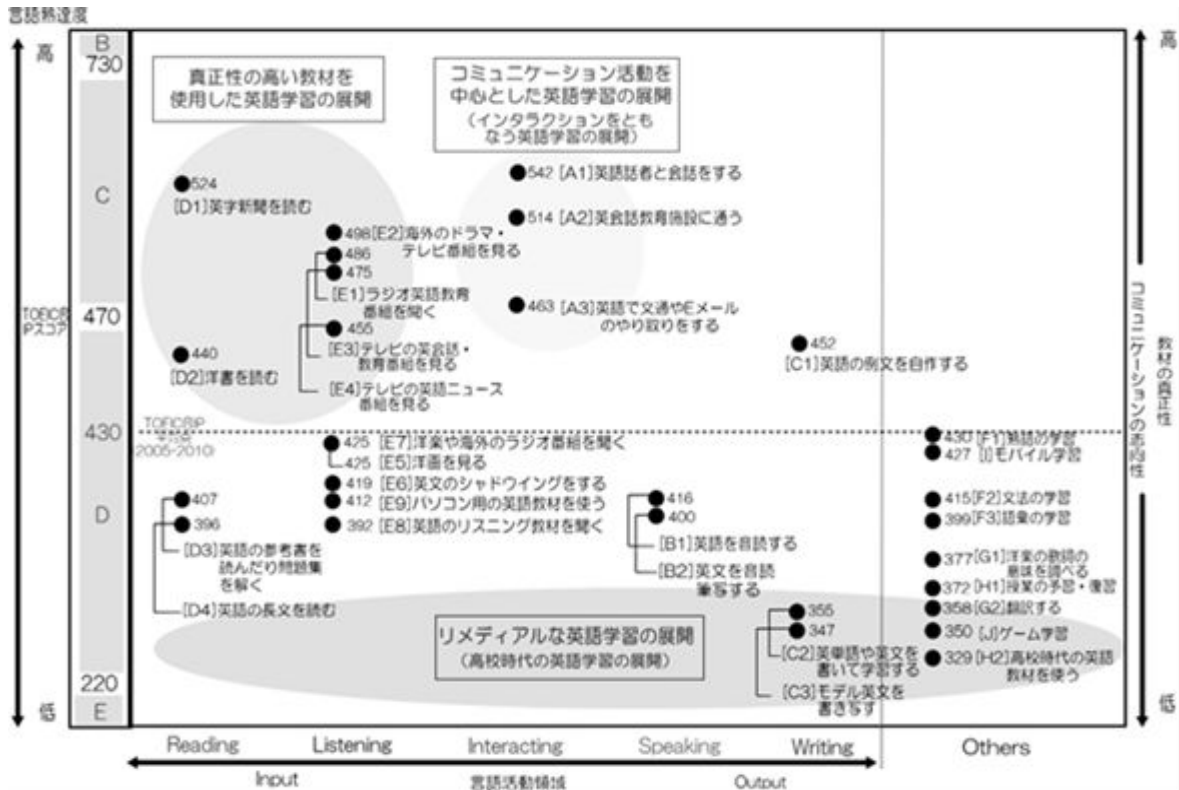


図1 授業外英語学習と言語熟達度の関係の概要図

グループの分類には応用し難い英語学習の概念を、右側にその他(Others)として、まとめて配置した。次に、授業外英語学習の各概念が、どの程度の言語熟達度の学習者層から構成されているかを可視化するために、各概念を構成したデータコードの全てに調査協力者の TOEIC®IP スコアをひも付けし、概念内の平均スコアを算出した。これによって、各授業外英語学習の概念が、どの程度の言語熟達度の学習者層で構成されているかを明らかにできた。

上述の可視化を目的とした分析手順を経て、図上に、各概念の No. を[括弧]内に示し、概念名を表記し、概念内の平均 TOEIC®IP スコアを併記した上で、丸()印を縦軸の言語熟達度と横軸の言語活動領域に合わせて配置することで、授業外英語学習と言語熟達度の関係の概要図を作成した。なお[括弧]内の No. は、表 2 および図 1 で示した概念 No. と対応している。概要図に各授業外英語学習の概念を配置することによって提示できる、言語熟達度のとの関係を以下に考察する。

言語熟達度の高群では、スカイプの使用や英会話教育施設に通うなど、他者とインタラクティブな英語学習が行われていることが分かった。また、英字新聞や海外のテレビ番組などの真正性の高い教材が使われ、聞く・書く・話すなどを同時に行う領域横断的・総合的な英語学習が行われていた。

一方、言語熟達度の低群では、文法や語彙の学習、高校時代の英語教材の復習など、リメディアルな英語学習が行われ、また、教科書のモデル英文の書き写しや、日本語訳を行う学習など、テキスト中心の学習が行われていることが明らかになった。

(2) 上述の(1)から、コミュニケーションを中心とした自律英語学習の領域に研究を焦点化し、オンライン英会話と学習履歴を記録できるシステムを web 上に構築し、自律英語学習の遂行可否について、その要因の調査を行った。さらに、被験者にインタビュー調査を実施し、自律英語学習の評価モデルを試作した。調査項目は、対人志向の高低、週平均の英語学習時間、英語学習の目標・学習内容・学習方略、特性的自己効力感について、検討した。また、インタビューでは、オンライン英会話に計画的に取り組むことができた実施群と非実施群に分け、オンライン英会話に取り組むまでのプロセス、なぜ取り組めなかったのか(取り組もうとしたのか)、どのような支援が必要だったのか、学習後の内省、意見・感想・要望、などについてデータを収集した。その結果、実施群では、社会的ストラテジーの値が高い傾向が示され、また、文法や語彙の間違ひに対して寛容さを備えていることが明らかとなった。一方、非実施群では文法と語彙に関して、完璧さを求めるあまり、コミュニケーションを

ともなう自律英語学習に躊躇したり、学習の中断や先延ばし行動に繋がることが明らかとなった。また、学習の計画・レッスンの予約やポートフォリオによる学習記録についても、実施群と非実施群で特徴的な相違が明らかになった。詳細な分析は、現在進行中であるため、今後の研究課題として、本研究を続けている。

(3)まとめと研究課題として、本研究では、英語専攻の日本人大学生が実践している授業外英語学習の実態を調査し、具体的な学習内容を明らかにした。本研究の先行研究への貢献は、一つ目は、今まで暗黙知とされていた日本人大学生の授業外英語学習の具体的な学習内容を、質的手法を応用してカテゴリを生成・分類し、体系的に整理したことである。二つ目には、言語熟達度と授業外英語学習との関係を明らかにし、言語熟達度の高群、低群それぞれにみられる授業外英語学習のモデルを明示したことである。今後は、研究後半の Web 上に構築した学習計画・実施・記録のシステムを体系的・円滑に運用する体制整備・充実化を目標とし、授業外に行われる自律英語学習のデータ収集と精緻な分析、さらなる汎用性の高いモデルの構築・研究を目指していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

(1) 石橋嘉一, 三輪眞木子

英語専攻の日本人大学生における授業外英語学習の実態調査：英語学習内容のカテゴリ分析と言語熟達度との関係(査読あり) 日本教育工学会論文誌 第 38 号-1 巻, pp.39-48, 2014.

(2) Yoshikazu Ishibashi, How Can We Assess, Visualize and Scaffold Informal Language Learning? A case of informal English learning among Japanese college student (査読あり), ePIC 2012: ePortfolio and Identity Conference Proceedings (LFL 2012), Proceedings, pp.163-165, 2012.

[学会発表](計 14 件)

(1) 石橋嘉一、松田 岳士、中山実、言語コミュニケーション能力の評価：コモンルーブリックの理論的背景と活用の現況、2014 年度 定例研究会、仙台ガーデンパレス、仙台、平成 27 年 2 月

(2) 石橋嘉一、コミュニケーション教育シラバス・ワークショップの方法と実施、2014 年度定例研究会、仙台ガーデンパレス、仙台、平成 27 年 2 月

(3) 石橋嘉一、話したいけど話せない? オンライン英会話システムを活用した自律英語学習支援の実践と課題、日本コミュニケーション学会東北支部第 15 回研究大会、仙台青葉カルチャーセンター、仙台、平成 26 年 11 月

(4) 石橋嘉一、五十嵐紀子、吉武正樹、コミュニケーション教育の反省的視点、第 44 回日本コミュニケーション学会年次大会、琉球大学、那覇、平成 26 年 6 月

(5) 石橋嘉一、インタラクションを通じた授業外英語学習の促進：学習支援と評価方法に関する研究、日本コミュニケーション学会東北支部 2013 年度東北支部定例研究会、フォレスト仙台、仙台、26 年 3 月

(6) 石橋嘉一、五十嵐紀子、吉武正樹、想定外の状況に対応できるコミュニケーションの育成、日本コミュニケーション学会東北支部研究大会、大学コンソーシアム山形、山形、平成 25 年 11 月

(7) 石橋嘉一、コミュニケーション教育の実践と評価について考える：CEFR と ELP を参考にした学習者の成長の捉え方、日本ヘルスコミュニケーション学会 2013 年度学術大会、(招聘研究発表) 岐阜大学医学部、岐阜、平成 25 年 8 月

(8) 石橋嘉一、五十嵐紀子、吉武正樹、コミュニケーション教育の課題、第 43 回日本コミュニケーション学会年次大会、立教大学、東京、平成 25 年 6 月

(9) 佐藤学、松本茂、石橋嘉一、コミュニケーション学と教育、第 43 回日本コミュニケーション学会年次大会、学術シンポジウム、立教大学、東京、平成 25 年 6 月

(10) 石橋嘉一、ワークショップ：研究を伝える：集める、保つ、伝える、究める - 、総研大学術交流フォーラム 2012、国立歴史民俗博物館、研究方法ワークショップ、千葉、平成 24 年 10 月

(11) 石橋嘉一、日本人大学生の授業外英語学習の支援、総研大 学術交流フォーラム 2012、国立歴史民俗博物館、千葉、平成 24 年 10 月

(12) 石橋嘉一、自律英語学習促進効果の検証方法：英語学習ストラテジーの変遷をどう捉えるか、日本教育工学会第 27 回全国大会、長崎大学、長崎、平成 24 年 9 月

(13) Yoshikazu, Ishibashi, How Can We Assess, Visualize and Scaffold Informal Language Learning? A case of informal English learning among Japanese college students (査読あり) ePIC 2012 - ePortfolio and Identity Conference 2012, Savoy Place, London, England (July, 2012).

(14) Yoshikazu Ishibashi, Fostering Autonomous English Learning among

Japanese College Students in Informal Learning Settings (査読あり) ISIC 2012 - The Information Seeking and Behaviour Conference 2012, Keio University, Tokyo, Japan (September, 2012).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石橋 嘉一 (ISHIBASHI, Yoshikazu)
青森中央学院大学・経営法学部・講師
研究者番号：40604525